

『古代アメリカ』18, 2015, pp.41-63

<論文>

先古典期マヤ文明の宗教儀礼とものづくり

—グアテマラのセイバル遺跡で先古典期中期に埋納された黒曜石製石器を中心に—

青山和夫
(茨城大学)

【要旨】

本論は、グアテマラのセイバル遺跡で先古典期中期後半に埋納された黒曜石製石器の研究を中心に、先古典期マヤ文明の宗教儀礼とものづくりの一端を実証的に検証する。先古典期中期後半のセイバルでは、支配層が住居で黒曜石製石刃を生産し、特別な石器や石刃の製作屑を住居に埋納した。先古典期中期の支配層は、美術品や重要な実用品の黒曜石製石刃を生産して地位を正当化・強化し、ものづくりを政治的道具として活用したと考えられる。公共広場に埋葬された支配層男性には、13点というメソアメリカの神聖な数の黒曜石製石刃と完形の石刃残核が副葬された。セイバルの権力者は、公共広場で執行した公共祭祀で、高度な製作技術が窺われる完形の石刃残核や翡翠製装飾品などの象徴・儀礼的に重要な意味をもつ供物を埋納した。支配層が関わった黒曜石製石刃核などの交換、石刃の製作、使用と埋納儀礼についての知識と実践は、権力基盤を強化して王権の形成に一役買った。

【キーワード】

宗教儀礼、ものづくり、権力、黒曜石製石器、先古典期マヤ文明

【目次】

1. 問題の所在と本論の目的
2. 先古典期のセイバル遺跡の調査
3. 先古典期中期後半の支配層住居に埋納された黒曜石製石刃の工房の製作屑
4. 先古典期中期後半の支配層住居に供物として埋納された黒曜石製石器
 - 4-1. 供物 157
 - 4-2. 供物 123
5. 先古典期中期後半の公共広場の支配層の墓に副葬された黒曜石製石器
6. 先古典期中期後半の公共広場に供物として埋納された黒曜石製石器
 - 6-1. 供物 180
 - 6-2. 供物 170
7. 先古典期中期後半の公共広場の生け簀墓に副葬された黒曜石製石器
 - 7-1. 墓 153

7-2. 墓 145

7-3. 墓 146

8. 結論

1. 問題の所在と本論の目的

先古典期マヤ文明（前 1000～後 250 年）の起源と発展の過程は、まだよくわかっていない。とりわけ先古典期中期（前 1000～前 350 年）は、マヤ文明の起源と発展を解明する鍵となるが、その文化全般と主要利器であった石器に関するデータが不足している。先古典期中期の遺構や一次堆積遺物は、現地表面より 10m 以上も深い最下層に埋蔵されることが多いにもかかわらず、2m 四方の狭く深い試掘調査を通して主に収集されてきた [Sabloff 1994]。マヤ文明の諸遺跡では先古典期中期の遺構の大規模で層位的な発掘調査がほとんど実施されておらず、詳細な出土状況や遺構の性格がよくわかっていないのが問題である。その結果、王権や都市が出現する前の先古典期マヤ文明の宗教儀礼やものづくりをはじめとする具体的な人間の主体的な行為（行為者性＝エイジェンシー）に関して、発掘調査で得られた実証的な考古資料は少ない。

支配層が配下に職人を抱えていたメソポタミアやエジプトの諸王朝 [Wenke and Olszewski 2007] とは対照的に、古典期マヤ文明（後 250～1000 年）は、支配層がものづくりをする文明であった。王以外の王族や貴族は、書記として王の事績を碑文に記し、美術品を製作する工芸家になった [Aoyama 2007; Inomata 2001]。王家の人々や高い地位の貴族を含む支配層は、自らの手で美しいマヤ文字を刻んだ骨・貝製品といった美術品や重要な実用品の黒曜石製石刃などを製作した。王家や貴族の世帯では、木製品や皮製品も生産された。支配層の工芸家は、複数の社会的役割を担い、政治や戦争だけでなく、文字、暦、算術、天文観測、宗教儀礼、遠距離交換から手工芸まで農民が享受できない様々な知識や技術を専有することで権力基盤を強化した [青山 2007]。しかしながら、支配層のものづくりの起源と発展についてはよくわかっていない。

本論の目的は、上記の学問的な溝を埋めるために、グアテマラ共和国のセイバル (Ceibal) 遺跡で先古典期中期の支配層住居や公共広場に宗教儀礼の供物や墓の副葬品として埋納された黒曜石製石器の研究を中心に、先古典期マヤ文明の宗教儀礼とものづくりの一端を実証的に検証することである。石材の入手から黒曜石製石器の製作、使用、埋納に至る「石器の一生」に着目して、先古典期マヤ人の具体的な行為・活動を明らかにする。2005 年から 2015 年までのセイバル遺跡の大規模で層位的な発掘調査によって、6,000 点を超えるマヤ低地で 1 遺跡当たり最多の先古典期中期の黒曜石製石器が出土している。本論では、これまでマヤ低地でデータがなかった先古典期中期の支配層住居に埋納された黒曜石製石刃の工房の製作層の分析成果についても詳細に論じる。

黒曜石製石器の原産地は、蛍光 X 線分析と肉眼観察を組み合わせで同定した。オリンパスのハンドヘルド蛍光 X 線分析計 DELTA Premium を用いて 5,375 点の黒曜石製石器の産地を同定すると共に、全出土石器の産地を肉眼で同定した。蛍光 X 線分析計による分析数としては、マヤ考古学では 1 遺跡当たり最も多い。黒曜石は、先古典期中期にはグアテマラ高地のサン・マルティン・ヒロテペケ (San Martín Jilotepeque)、エル・チャヤル (El Chayal) とイシュテペケ (Ixtepeque) からセイバルに搬入されたが、

その詳細については別稿で論じる。ミズーリ大学における中性子放射化分析が、筆者を含む4名の研究者の肉眼による原産地同定の精度を確認するためのブラインド・テストとして行われ、96%以上の精度で反復可能な分析法であることが証明された [Braswell et al. 2000]。ハンドヘルド蛍光X線分析計を用いる産地同定を導入して、肉眼による原産地同定の精度をさらに高めた。

黒曜石製石器の属性分析と剥離面の切り合い関係の観察から、石器の製作工程について研究した。さらにマヤ考古学ではまだ広範に実施されていない、高倍率の金属顕微鏡を用いた分析法でセイバル遺跡出土の黒曜石製石器の使用痕を分析した。古代マヤ石器の使用痕研究の方法論的枠組みは、計267点の複製石器による体系的な実験使用研究に基づき確立した。黒曜石の使用痕については、光沢面、線状痕、ピットを総合的に観察して11の使用痕パターンに分類した。実験プログラムと使用痕パターンの詳細については、別稿を参照いただきたい [Aoyama 1999]。

この方法論の枠組みを、セイバル遺跡から出土した石器の使用痕分析に適用した。使用痕の観察にはオリンパス BHM 型落射照明付金属顕微鏡 (OLYMPUS BX60M) を使い、50 倍から 500 倍、特に 200 倍で行い、各石器の使用部位、操作法、被加工物といった石器の機能の基礎データを抽出した。複数の使用痕パターンが同一使用部位に観察される場合は支配的なパターンの次に副次的なパターンを示して、たとえば「bh」（支配的なパターンが木の加工で発達する b、副次的なパターンが使用痕の形成初期に見られる h）のように記述した。顕微鏡写真撮影装置 (OLYMPUS PD-20) を用いて、使用痕が認められる部位を中心に写真を撮影した。

2. 先古典期のセイバル遺跡の調査

セイバル遺跡は、グアテマラを代表する先古典期・古典期マヤ文明の大都市遺跡である。セイバルの人々は、先古典期中期から古典期終末期（後 800～900 年）まで、マヤ低地の他地域、メキシコ湾岸低地南部、メキシコのチアパス高地やグアテマラ高地など周辺地域の人々と活発に交流していた。先古典期中期に居住が開始されてから 1 回目の繁栄期を迎え、先古典期後期（前 350～後 250 年）に人口が 1 万人ほどの都市へと発展した。ハーバード大学のセイバル遺跡の調査（1964～1968 年）では、古典期マヤ文明に重点が置かれたために、先古典期マヤ文明に関するデータが不足していた [Willey 1978]。

共同団長の筆者は、団長の猪俣健（アリゾナ大学）と日米の研究資金を集め、グアテマラ、アメリカ、スイス、フランス、カナダ、ドイツ、ロシアの研究者と多国籍チームを編成して、ハーバード大学の調査から約 40 年ぶりとなる 2005 年からセイバル遺跡の調査を実施している。調査の目的は、マヤ文明の起源、王権や都市の盛衰などの研究である。調査団は、都市中心部の神殿ピラミッド、「中央広場」、王宮、支配層や被支配層の住居跡などに広い発掘区を設定し、現地表面から 10m 以上も下にある自然の地盤まで数年かけて掘り下げるという、大規模で層位的な発掘調査に挑んだ [青山 2013]。

セイバル遺跡の公共広場「中央広場」では、東側と西側に神殿ピラミッドがそびえ、太陽の運行と関連した公共祭祀建築群を構成した。これは、グアテマラのウシャクトゥン (Uaxactun) 遺跡の「グループ E」で最初に確認されたので「E グループ」と呼ばれ、その後の調査によって数多くの都市で見つかっている。マヤ考古学では伝統的に建造物の発掘調査に重点が置かれてきたが、「中央広場」の広範囲で層位的な発掘調査によって、自然の地盤の上に先古典期中期前半（前 1000～前 700 年）のレ

アル (Real) 期初頭の前 1000 年頃に建造された公共広場と、その東と西に面する土製の公共祭祀建築の基壇が出土した。これらは、現在のところマヤ低地で最古である [Inomata et al. 2013]。

セイバル遺跡の中心部と周辺部において大規模で精密な発掘調査を実施し、土器編年の細分化をはじめとする詳細な遺物の分析及びマヤ考古学では例外的に豊富な 100 点以上の試料の放射性炭素年代によって詳細な編年を組み立てた。その結果、先土器時代 (前 1000 年以前) に居住地の移動を繰り返していた狩猟採集民の集団が定住共同体を確立するというプロセスにおいて、①定住という新たな生活様式は、セイバルの全ての社会集団の間で同時に起こらなかった、②大規模な公共祭祀建築は、定住共同体が確立された後ではなく、それ以前から建設された、という実証的なデータが得られた [Inomata et al. 2015]。

紀元前 1000 年頃にセイバルで最初の公共祭祀建築と公共広場を創設する公共祭祀の一環として、セイバルで最大の磨製石斧を含む最多の緑色石製磨製石斧の供物が公共広場に埋納された。緑色石製磨製石斧は、先古典期中期前半のレアル期を中心に、先古典期中期後半のエスコバ (Escoba) 期 (前 700 ~ 前 350 年) まで「中央広場」に埋納され続けた [青山 2015]。「中央広場」では、先古典期中期のメソアメリカで権力者が装着した特徴的な美術様式の翡翠製胸飾りやマヤ文明の権力者の間で最も重宝された海産貝のウミギクガイに生首を彫刻した胸飾りの供物も出土した。初期のセイバルにも、こうした胸飾りを身に着ける権力者がいたことがわかる。セイバルや周辺地域の権力者は、緑色の磨製石斧や翡翠製装飾品を埋納する儀礼を共有していた。

先古典期中期前半のレアル期のセイバルでは、黒曜石製石刃核の遠距離交換と石刃の生産を可能にする必要最低限の複雑な政治経済組織が発達していた [青山 2014]。黒曜石の遠距離交換は、先古典期中期後半のエスコバ期に飛躍的に増大した。セイバルの先古典期中期の権力者は地域間交換ネットワークに参加して、グアテマラ高地産の翡翠や他の硬質の緑色石、黒曜石や海産貝のような重要な物資だけでなく、世界観、宗教儀礼や美術・建築様式などの知識や技術を取捨選択しながら交換してマヤ文明を築き上げていった。

次に、先古典期中期後半のエスコバ期の支配層住居に埋納された黒曜石製石刃の工房の製作屑と黒曜石製石器の供物、公共広場の支配層の墓に副葬された黒曜石製石器、公共広場に供物として埋納された黒曜石製石器、公共広場の生け贅墓に副葬された黒曜石製石器について詳細に論じる。

3. 先古典期中期後半の支配層住居に埋納された黒曜石製石刃の工房の製作屑

セイバル遺跡中心部の大規模な発掘調査によって、先古典期中期後半のエスコバ 2 期 (前 600 ~ 前 450 年) に支配層の住居跡に埋納された黒曜石製石刃の製作屑が一括遺物として検出された。石器の総数は 1,323 点 (421.1g) であり、セイバルの「中央広場」の西 160m に位置する、支配層の住居跡「ツヌン (Tz'unun) 建造物」の北 1.6m から出土した (図 1)。石器は自然の地盤の上にコンパクトに集中して出土し (0.1m³)、黒曜石製石器の出土密度 (13,230 点/m³、4,211g/m³) は本論で扱った資料の中で最も高い (図 2)。黒曜石製石器は 1 点のエル・チャヤル産黒曜石製石刃以外はサン・マルティン・ヒロテペケ産黒曜石で製作され、チャート製石器や土器など他の遺物は共伴しなかった。

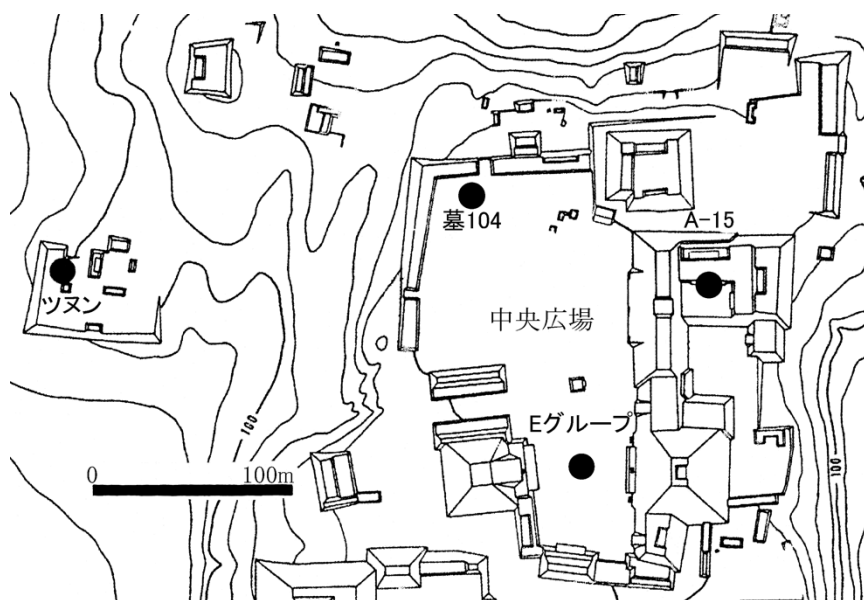


図1 先古典期中期後半のセイバル遺跡中心部で黒曜石製石器が埋納された供物や墓

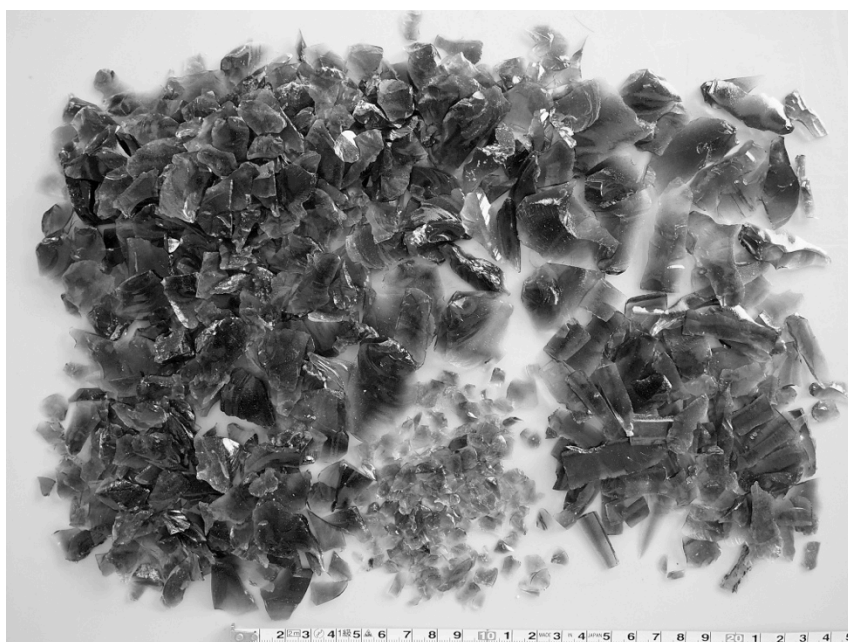


図2 先古典期中期後半のエスコバ2期に支配層住居「ツヌン建造物」に埋納された黒曜石製石刃の工房の製作屑

石器組成をみると、石刃核の整形作業のために打撃剥離された大小の剥片 1,193 点、小型打撃石刃 13 点、発掘調査では一般的にあまり出土しない石刃の失敗品や破損品、剥離作業面調整石刃や石刃残核片などが含まれる（表 1）。剥片石核は出土せず、自然面残存率（7.6%）は先古典期中期後半のセイバルの平均比率（16.9%）よりもはるかに低い。つまり石器は、自然石または自然面を残す剥片石核から剥離されたのではなく、大型の石刃核から剥離されたのである。ところが大型石刃は全く出土せず、定型的な石刃（49 点）は初期押圧石刃（66 点）よりも少ない。総体的に押圧石刃（115 点）が黒曜石製石器に占める比率（8.7%）が極めて低い。さらに先端部と打点側の押圧石刃の比は 0.56 であるので、先端部の石刃の約半分が含まれていないことがわかる。換言すると、数多くの打撃石刃と押圧石刃が、石刃の工房から別の場所に搬出されて使用されたのである。

型式自然面なし自然面あり 合計

小型打撃石刃	11	2	13
剥離作業面調整石刃	0	1	1
完形の初期押圧石刃	7	1	8
ほぼ完形の初期押圧石刃	1	0	1
初期押圧石刃・打点側	24	3	27
初期押圧石刃・中間部	16	0	16
初期押圧石刃・先端部	10	4	14
石刃・打点側	12	0	12
石刃・中間部	25	4	29
石刃・先端部	8	0	8
石刃残核片	1	0	1
一次剥片	0	18	18
二次剥片	0	68	68
三次剥片	1107	0	1107
合計	1222	101	1323

表 1 先古典期中期後半のエスコバ 2 期にセイバル遺跡の支配層住居「ツヌン建造物」に埋納された黒曜石製石刃の製作屑

本論では、専門手工業の工房を「手工業生産者の世帯の需要を超える製品の生産場」と定義する。石刃の生産規模の推定を試みるならば、石刃残核片は 1 点しか出土しなかったが、製作屑の黒曜石の特徴を肉眼で観察すると複数の石刃核から剥離されたことが明白である。各石刃核から一周目に押圧剥離された初期押圧石刃の数に基づいて、石器組成で欠如している石刃核の数を推定する。実験研究によれば、石刃核 1 点から 15～18 点の初期押圧石刃を剥離できる [Clark 1997]。工房で生産された全ての初期押圧石刃が一括遺物として埋められたのではないが、少なくとも 36 点（完形 8 点、ほぼ完形 1 点、打点側の石刃片 27 点に基づく）から 66 点の完形の初期押圧石刃（完形と全ての石刃片の数に基づく）が生産されたとすると初期押圧石刃は 3～5 点の石刃核から剥離されたことになる。実験研

究によれば、石刃核から 150～200 点ほどの押圧石刃を 2 時間未満で剥離できるので、3～5 点の石刃核から 450～1,000 点の完形の押圧石刃が生産されたといえよう。黒曜石製石刃の生産はパート・タイム的なものであったが、たとえば 5 人からなる世帯が年間 10～20 点の完形の押圧石刃を消費したと仮定すると数百人の需要を満たす規模であった。

無作為抽出した 81 点の黒曜石製石器の使用痕分析によって、大部分の石器が工房の製作屑であることを確認した。使用痕を分析した剝片、小型打撃石刃と初期押圧石刃は、全て未使用である。石刃 1 点（分析石器の 1.2%）だけに使用痕が認められ、貝・骨の切断に使用された。黒曜石製石刃の製作者と貝・骨製品の製作者は別人であった可能性があるが、同一人物であった可能性もあろう。

メソアメリカの考古学調査、民族史料や民族誌によれば、石器製作の宗教儀礼的な側面が明らかである [Aoyama 2014]。16 世紀のメキシコ中央高地のトラスカラ (Tlaxcala) の石刃工人は、石刃製作に先立ち断食し、祈祷した。石刃が剥離中に壊れたならば、ちゃんと断食しなかったためだとされた。彼らは、剥離した石刃をきれいな布の上に置き、香を焚き込めた。次に 4 人の神官が石刃を祝福する歌を歌い終わると、最年長の神官が太鼓を叩いた、とスペイン人修道士トリビオ・デ・モトリニアは書き残している [Motolinía 1973 [1526] :44-45]。黒曜石製石刃のような専門的な石器の製作技術に関する知識と関連する宗教儀礼は、1 つのセットとして石器の製作者の間で共有されていた。石器製作の宗教儀礼的な側面は、マヤ文明や他の先産業社会におけるものづくりや政治経済組織を研究する上で念頭に置かなければならない重要な視点といえよう。

民族考古学の調査によれば、メキシコのチアパス州の熱帯雨林に住むラカンドン (Lacandon)・マヤ人は、20 世紀前半に「神の家」と呼ぶ村の公共祭祀建築の中でチャート製石鏃を製作した。1970 年代から 1980 年代の民族考古学の調査によれば、ラカンドン・マヤ人はチャート製石鏃を家屋の中や周囲で製作した [Nations and Clark 1983]。伝統的なラカンドン・マヤ人は、朝食前の早朝のみ石器を製作した。石器を製作する前に食べると、打撃石刃をうまく剥離できないからだという。石器の製作者は、2 本の木の棒の間に綿製受け布を張って剥離する石刃などを受け止め、その上に残った石屑をヒョウタン製容器に入れて屋外に運搬した。これは、家族、特に小さな子供が石屑で足に怪我をしないようにという配慮であった。

古典期マヤ文明の諸都市では、工房で廃棄された大量の石器の製作屑が王や貴族の墓の周囲および神殿ピラミッドなどの公共建築の中に埋納された [青山 2002]。ティカル (Tikal) では、黒曜石製石刃とチャート製両面調整石器の大量の製作屑が埋納された王墓や貴族の石室墓が見つかった [Moholy-Nagy 1997]。製作屑の埋納は単なるゴミの廃棄ではなく、重要な宗教的な意味があり、葬送儀礼の一部を構成していたと考えられる。支配層が、王や貴族を地下界に送るために埋納したのであろう。工房で廃棄された大量の石器の製作屑が、古典期には支配層の墓や公共建築に限られていたことは注目に値する。このことは、支配層が主に実用品であった黒曜石製石刃やチャート製両面調整石器の生産および廃棄にも関わっていたことを強く示唆するからである。

対照的に、先古典期中期後半のセイバルでは支配層が自らの住居で石刃を生産した後に、製作屑を住居に埋納した。埋納した黒曜石製石刃の工房の製作屑には黒曜石以外の遺物が混入せず、集中して高密度に出土している。黒曜石製石刃の製作屑は単なるゴミではなく、宗教儀礼的な側面をもち、石刃の製作者が家屋の中あるいは周囲の工房から製作屑をなんらかの容器に入れて運び、注意深く埋納した蓋然性が高い。先古典期中期後半のセイバルの支配層住居跡に埋められた黒曜石製石刃の工房の

製作層は、現在のところマヤ低地で最古の石刃工房の証拠をなす。

4. 先古典期中期後半の支配層住居に供物として埋納された黒曜石製石器

4-1. 供物 157

供物 157（発掘番号 CB211B-2-7-1）は、上記の支配層の大きな住居跡「ツヌン建造物」の床面の下にエスコバ 2 期に埋納された（図 1）。供物は大きな土器片と 2 点の黒曜石製石器からなる（図 3）。「ツヌン建造物」の支配層は、自然石から剥片を数点ほど打撃剥離しただけの超大型の剥片石核およびほぼ完形の初期押圧石刃を住居の床下に埋納した（表 2）。蛍光 X 線分析によれば、2 点ともサン・マルティン・ヒロテペケ産である。超大型の剥片石核は、これまでセイバル遺跡で出土した最も大きな剥片石核であり、大きな剥片をさらに剥離することが可能である。その重さは 121.3g もあり、2 番目に大きな剥片石核（25.5g）よりもずば抜けて大きい。セイバルの支配層が、グアテマラ高地から黒曜石製石刃核だけでなく、大きな自然石も搬入したことがわかる。セイバルの人々は大部分の石刃を 2 つか 3 つに折って石刃片として使用したので、ほぼ完形の石刃は極めて珍しい。

使用痕分析によって、ほぼ完形の初期押圧石刃はあまり使い込まれていないことが明らかになった。右側辺には使用痕は観察されず、左側辺に使用痕の形成初期に見られる使用痕パターン h（鈍く弱い光沢面で、比較的長い線状痕と大小様々のピットが観察される）と刃部に平行する線状痕が認められた。すなわち、初期押圧石刃の使用者は、左側辺だけを使って同定不能の被加工物を切断した。自然石から剥片を数点ほど打撃剥離しただけの超大型の剥片石核および石刃核から最初に押圧剥離したほぼ完形の初期押圧石刃という特別な石器を注意深く埋納していることから、これらの石器は「ツヌン建造物」の支配層にとって象徴・儀礼的に重要な意味をもったと考えられる。

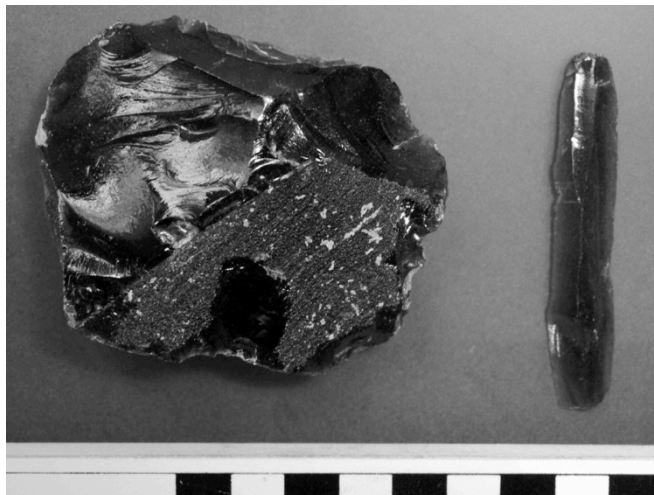


図 3 先古典期中期後半のエスコバ 2 期に支配層住居「ツヌン建造物」に埋納された供物 157
（大型の剥片石核とほぼ完形の初期押圧石刃）

型式	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
エスコバ2期、「ツヌン建造物」、供物 157 (発掘番号 CB211B-2-7-1)				
剥片石核	7.5	6.3	2.9	121.3
ほぼ完形の初期押圧石刃	6.9	1.3	0.4	3.7
エスコバ2期、「中央広場」、供物 180 (発掘番号 CB203K-8-7-3)				
ほぼ未加工の自然石	12.6	7.3	2.3	245.4
エスコバ3期、「中央広場」、供物 170 (発掘番号 CB203K-3-6-3)				
石刃残核	6.7	1.5	0.9	13.5
石刃残核	6.4	1.1	0.9	9.7

表 2 先古典期中期後半のセイバル遺跡で供物として埋納された黒曜石製石器

4-2. 供物 123

供物 123 (発掘番号 CB201B-13-6-3・CB201B-13-6-4) は、「中央広場」の東側に隣接する支配層の住居跡「建造物 A-15 下層 4」の中に埋納された (図 1)。「建造物 A-15」などが中庭を囲む建築群は、先古典期中期から支配層の住居として代々活用され、古典期終末期にはセイバル王朝の王宮として機能した。このエスコバ3期 (前 450～前 350 年) の供物は、計 11 点の挟り入りの特徴的な石刃からなる (図 4)。7 点が打点側の石刃、4 点は中間部の石刃であるが、石刃の製作者は全ての石刃の両側辺に挟りを入れた (表 3)。蛍光 X 線分析によれば、サン・マルティン・ヒロテペケ産の 1 点を除き、残りの 10 点はエル・チャヤル産である。セイバルの人々は、先古典期中期後半には黒曜石を主にサン・マルティン・ヒロテペケから搬入した。それに加えて以下の使用痕のデータによれば、挟入石刃の製作者あるいは使用者はエル・チャヤル産黒曜石を意図的に選択して木の加工具として用いた。

石器の使用痕分析によれば、全ての石刃が使用された。全部で 25 ヶ所の使用部分を確認したが、木の切断 (80%)・削り (8%) という木の加工が主流であった。とりわけエル・チャヤル産黒曜石製石刃は木の加工具であり、両側辺が木の切断に、3 点の石刃の下端が木の削りに使われた。石刃の製作者は、打点側の上端近くに大きな挟りを入れた。石刃の使用者は上端部を着柄して、挟りよりも下の部分を用いたことがわかる。最も頻繁に観察されるのは、使用痕パターン b である。これは木の加工で広範囲に発達する明るく滑らかな光沢面で、線状痕は一般的に細く長く、比較的多くのピットが観察される。

興味深いことに、両側片に使用痕パターン bh (支配的なパターンが b、副次的なパターンが使用痕の形成初期に見られる h) が観察されるのは 1 点のみ (遺物番号 123-1、図 4.1) であり、片方が bh でもう一方の側片が hb というように使用痕の発達に違いが見られる。つまり石刃の使用者は、左右どちらかの側辺を主に使用した。1 点のエル・チャヤル産黒曜石製石刃 (遺物番号 123-7、図 4.7) では、石刃の使用者は右側辺で同定不能の被加工物を切断したが、左側辺で木を切断したので、両側辺とも木の切断に使った可能性が高い。

エル・チャヤル産黒曜石製挟入石刃 10 点が、全て木の加工に使われていたことは重要である。マヤ低地北部のチチェン・イツァ (Chichén Itzá) 遺跡の「聖なるセノーテ」から木製の神像、儀礼用の杓

や装飾品が出土している [Coggins 1992]。また植民地時代の民族史料には、16 世紀のマヤ人が木製神像を製作していたという記録が残っている [Landa 1994 [15●●] :126]。セイバル遺跡の石刃は薄く小さいので、森林の伐採のような骨の折れる力仕事ではなく、木製祭具や木器などの精巧な木製品の製作に用いられた可能性が高い。

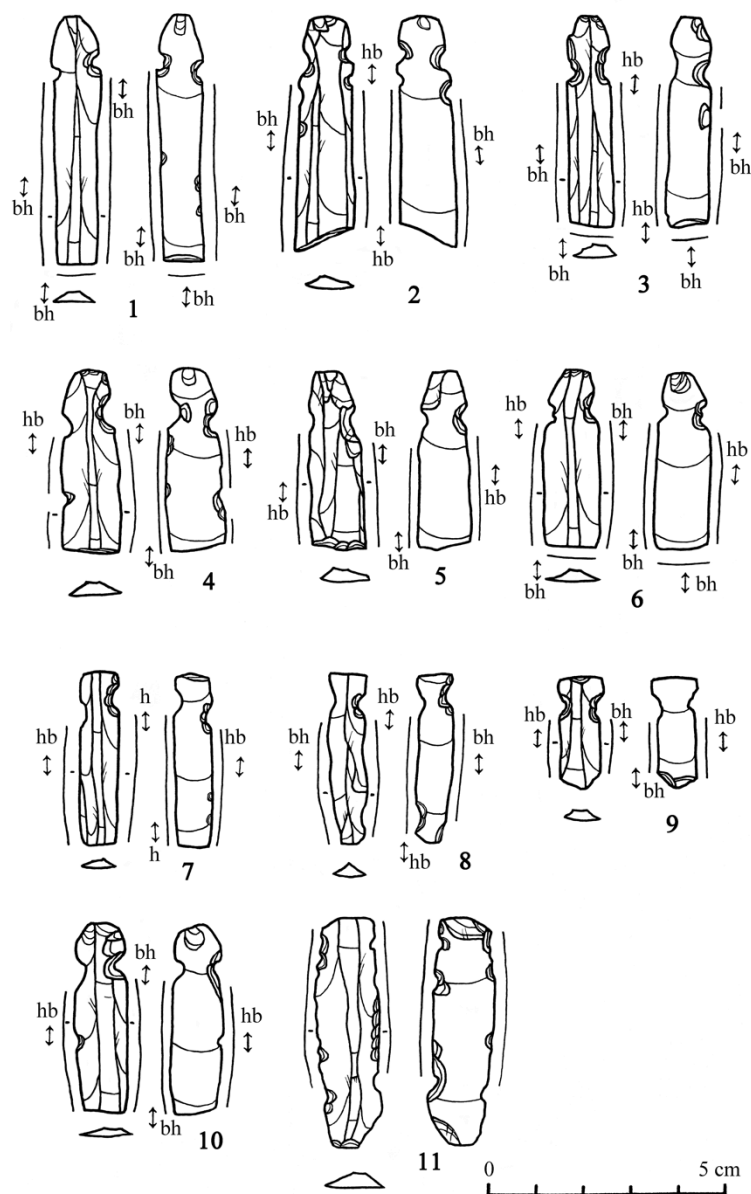


図4 先古典期中期後半のエスコバ3期に支配層住居「建造物 A-15 下層 4」に埋納された供物 123
(1~9 が順に遺物番号 123-1~9、10 が遺物番号 681-1、11 が遺物番号 123-10)

番号	産地	使用部位	運動方向	使用痕 パターン	推定作業	型式	大きさと重さ
123-1	CH	右側辺	平行	bh	木の切断	打点側	5.7×1.1×0.3 cm, 2.1 g
		左側辺	平行	bh	木の切断		
		下端	直交	bh	木の削り		
123-2	CH	右側辺	平行	hb	木の切断	打点側	5.3×1.4×0.3 cm, 2.7 g
		左側辺	平行	bh	木の切断		
123-3	CH	右側辺	平行	hb	木の切断	打点側	4.9×1.1×0.4 cm, 2.7 g
		左側辺	平行	bh	木の切断		
		下端	直交	bh	木の削り		
123-4	CH	右側辺	平行	bh	木の切断	打点側	4.2×1.4×0.3 cm, 2.2 g
		左側辺	平行	hb	木の切断		
123-5	CH	右側辺	平行	bh	木の切断	打点側	4.1×1.3×0.4 cm, 2.5 g
		左側辺	平行	hb	木の切断		
123-6	CH	右側辺	平行	bh	木の切断	打点側	4.1×1.4×0.3 cm, 1.9 g
		左側辺	平行	hb	木の切断		
		下端	直交	bh	木の削り		
123-7	CH	右側辺	平行	h	切断	中間部	4×1×0.3 cm, 1.1 g
		左側辺	平行	hb	木の切断		
123-8	CH	右側辺	平行	hb	木の切断	中間部	3.9×0.9×0.2 cm, 0.8 g
		左側辺	平行	bh	木の切断		
123-9	CH	右側辺	平行	bh	木の切断	中間部	2.6×1.1×0.3 cm, 0.8 g
		左側辺	平行	hb	木の切断		
681-1	CH	右側辺	平行	bh	木の切断	打点側	4×1.2×0.2 cm, 1.3 g
		左側辺	平行	hb	木の切断		
123-10	SMJ	右側辺	—	微小剥離痕	放血儀礼	中間部	5.2×1.5×0.4 cm, 3 g
		左側辺	—	微小剥離痕	放血儀礼		

CH : エル・チャヤル、SMJ : サン・マルティン・ヒロテペケ

表 3 先古典期中期後半のエスコバ 3 期に支配層住居「建造物 A-15 下層 4」の供物 123 に埋納された
黒曜石製抉入石刃

サン・マルティン・ヒロテペケ産黒曜石製石刃（遺物番号 123-10、図 4.11）は、抉りの加工と使用痕パターンが異なる。抉入石刃の製作者は、最も大きな抉りを上端の近くではなく下端部に入れ、さらに小さな抉りを上端部に入れた。石刃の使用者は下端部を着柄して、中間部と上端部を使った。石刃には顕著な光沢や線状痕は発達しておらず、数回使用した際に特徴的に生じる微小剥離痕のみ観察された。この石刃は、1 回きりの放血儀礼に使用されたと推定される。

供物 123 は、挟り入りの特別な石刃 11 点が埋納されたセイバル遺跡で唯一無二の一括遺物である。「建造物 A-15 下層 4」の支配層は、木の加工具のエル・チャヤル産黒曜石製挟入石刃 10 点と放血儀礼に使用したサン・マルティン・ヒロテペケ産黒曜石製挟入石刃を住居の中に注意深く埋納した。埋納された石器自体に象徴・儀礼的な意味があった可能性があるが、埋納するという行為自体に意味があったという解釈もあり得る。あるいはその両方の可能性もあろう。

5. 先古典期中期後半の公共広場の支配層の墓に副葬された黒曜石製石器

特別な黒曜石製石器は、支配層の墓に副葬された。「中央広場」の北端近くで検出された先古典期中期後半のエスコバ3期の墓104には、支配層男性が広場の床面5の下への盛り土の中に伸展葬された。顔は大型の完形の土器で覆われ、遺体の右側に翡翠製装飾品、赤の顔料が付着した貝製品、13点の黒曜石製石刃、石刃残核1点などが副葬されていた [Inomata et al. 2009]。貝製品は、古典期の書記が使用したインク入れに酷似しており、この支配層男性が、マヤ文字や図像を描いた可能性がある。副葬された石刃は、現在のところメソアメリカで13の数字を示す最古の石刃である（図5）。メソアメリカの神聖暦260日暦（20日×13）の基本をなし、マヤの13層の天上界を象徴した13という神聖な数が、この時期に既に重要であったことがわかる。



図5 先古典期中期後半のエスコバ3期にセイバル遺跡の「中央広場」に埋葬された支配層男性の墓 104 に副葬された 13 点の黒曜石製石刃

蛍光X線分析によれば、13点全てサン・マルティン・ヒロテペケ産である。13点の石刃は、5点の完形の石刃、2点のほぼ完形の石刃、2点の打点側と4点の下端部の石刃からなる（表4）。石器の使用痕分析によれば、全ての石刃が使用され、全部で26ヶ所の使用部分を確認した。その内訳は、同定不能の被加工物の切断（53.8%）、木の切断・削り（30.8%）、貝・骨の切断（7.7%）、肉・皮の切断（7.7%）である（図6）。支配層男性が、副葬品の石刃を生前に使ったのであれば、多様なものづくりに従事した可能性を指摘できよう。

黒曜石の特徴を詳細に検討したところ、13点の石刃は単一の石刃核から剥離されたのではないことがわかった。打点側と中間部の2組の石刃は接合することができたが、使用痕分析によれば接合され

た石刃は異なった作業に用いられた。第1の接合例では、打点側の石刃は木の切断に、中間部の石刃は同定不能の被加工物の切断に使用された。第2の接合例では、打点側の石刃は同定不能の被加工物の切断に、中間部の石刃は肉・皮の切断に用いられた。

番号	産地	使用部位	運動方向	使用痕 パターン	推定作業	型式	大きさと重さ
154-1	SMJ	右側辺	平行	h	切断	完形	9×1×0.3 cm, 2.7 g
		左側辺	平行	hb	木の切断		
154-2	SMJ	右側辺	平行	h	切断	ほぼ完形	9×1.4×0.2 cm, 3.6 g
		左側辺	平行	h	切断		
154-3	SMJ	右側辺	平行	h	切断	完形	8.4×1×0.3 cm, 2 g
		左側辺	平行	h	切断		
154-4	SMJ	右側辺	平行	hb	木の切断	完形	8.3×1.2×0.2 cm, 2.6 g
		左側辺	平行	hb	木の切断		
154-5	SMJ	右側辺	平行	h	切断	打点側	5.1×1.2×0.3 cm, 2.2 g
		左側辺	平行	h	切断		
154-6	SMJ	右側辺	平行	h	切断	打点側	3.5×0.9×0.3 cm, 0.9 g
		左側辺	平行	hb	木の切断		
154-7	SMJ	右側辺	平行	h	切断	先端部	2×1.3×0.2 cm, 0.6 g
		左側辺	直交	bh	木の削り		
155-1	SMJ	右側辺	平行	hb	木の切断	完形	8.8×1.1×0.3 cm, 3.1 g
		左側辺	平行	hb	木の切断		
155-2	SMJ	右側辺	平行	h	切断	ほぼ完形	7.2×0.7×0.2 cm, 1.2 g
		左側辺	平行	bh	木の切断		
155-3	SMJ	右側辺	平行	hc	貝・骨の切断	完形	6.5×1×0.2 cm, 1.5 g
		左側辺	平行	hc	貝・骨の切断		
155-4	SMJ	右側辺	平行	h	切断	先端部	5.5×0.6×0.2 cm, 0.5 g
		左側辺	平行	h	切断		
155-5	SMJ	右側辺	平行	f	肉・皮の切断	先端部	4.9×1.1×0.3 cm, 1.6 g
		左側辺	平行	f	肉・皮の切断		
155-6	SMJ	右側辺	平行	h	切断	先端部	3.7×0.9×0.3 cm, 0.7 g
		左側辺	平行	h	切断		

SMJ : サン・マルティン・ヒロテベケ

表4 先古典期中期後半のエスコバ3期にセイバル遺跡の「中央広場」に埋葬された
支配層男性の墓104に副葬された黒曜石製石刃

社会的・象徴的に重要な意味をもつ 13 点の石刃が、古典期の近隣遺跡で埋納された。古典期後期のアグアテカ (Aguateca) 遺跡の 3 代目王の神殿「建造物 L8-5」の供物 4 では、13 点のエル・チャヤル産黒曜石製石刃に複数の挟りが入っており、ヘビを表象したと考えられる [Aoyama 2006]。挟入石刃は、神殿に埋納された王の儀式石器であった。マヤ文明の神の睡蓮ヘビは、13 という数の守護神であり、睡蓮ヘビの頭飾りの王冠を着けた古典期の王もいた [Miller and Taube 1993:184]。古典期終末期のグアテマラのエル・レイナード (El

Reinado) 遺跡中心部の支配層住居の供物 84 でも、13 点のエル・チャヤル産黒曜石製石刃がマヤ・アーチの部屋を増築する際に床面に埋納された [Aoyama and Laporte 2009]。

セイバルの墓 104 に副葬された黒曜石製石刃残核は、大きさが $5.3 \times 1.1 \times 1 \text{cm}$ 、重さが 8.6g という、これまでセイバル遺跡で出土した最も小さく軽い完形の石刃残核である。打面の大きさは $0.8 \times 0.6 \text{cm}$ に過ぎない。石刃残核には、幅が 1cm 未満という小さな石刃を失敗することなく 11 点も連続して押圧剥離した痕跡が認められ、先古典期中期後半のセイバルで活躍した石刃の製作者の極めて高度な技術が窺われる。被葬者の支配層男性が石刃の製作者であったならば、こうした小さな石刃を製作する名人であったと考えられよう。重要なのは、この支配層男性が、13 というメソアメリカの神聖な数の概念をエスコバ 3 期に享受していたという事実である。

古典期の王家の人々や高い地位の貴族を含む支配層は、同一人物が美術品や実用品の黒曜石製石刃を製作した [Aoyama 2009]。支配層による洗練された美術品や石刃の製作活動は超自然的な意味をもち、知識教養階層の王族・貴族と農民の地位の差を拡大した。先古典期中期のセイバルの支配層も、骨・貝製品や木製品のような美術品や石刃を生産して地位を正当化・強化し、ものづくりを政治的道具として活用したと考えられる。

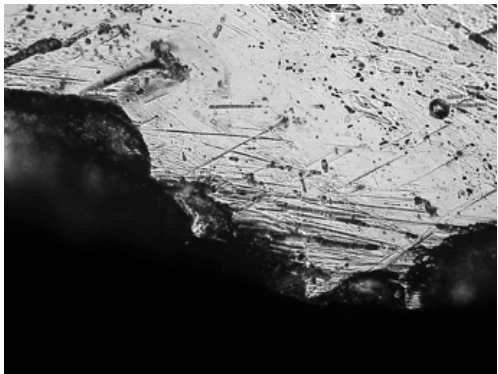


図6 セイバル遺跡の墓 104 に副葬された黒曜石製石刃の使用痕 (パターン bh、木の切断、200 倍)

6. 先古典期中期後半の公共広場に供物として埋納された黒曜石製石器

6-1. 供物 180

セイバルの権力者は、先古典期中期前半のレアル期にはマヤ低地の西隣のメキシコ湾岸低地やチアパス地方との交流を強く示唆する緑色石製磨製石斧を「中央広場」に主に埋納し続けたが、先古典期中期後半のエスコバ期には緑色石製磨製石斧の埋納が減少した。供物 180 (発掘番号 CB203K-8-7-3) は、「中央広場」に面する「E グループ」の東西の中心軸上に埋納された (図 1)。セイバルの権力者は、エスコバ 2 期に東西 90cm、南北 1m ほどの十字状の穴を「中央広場」に掘って、穴の中央部に 2 点の緑色石製磨製石斧と超大型のほぼ未加工の黒曜石の自然石、その南側に緑色石製磨製石斧 1 点を配置した。

蛍光X線分析によれば、超大型の黒曜石の自然石はサン・マルティン・ヒロテペケ産である。黒曜石には、上端部、両側縁と下端部に小さな剥片が剥離した痕跡があるが、石器の製作者は使用可能なより大きな剥片をあえて剥離しなかった（図7）。これはこれまでにセイバル遺跡で出土した最大の黒曜石であり、重さは 245.4 g もあって他の黒曜石製石器を圧倒する（表 2）。この超大型のほぼ未加工の黒曜石の自然石は、上記の供物 157 の超大型の剥片石核と共に、セイバルの支配層がグアテマラ高地から黒曜石製石刃核だけでなく、大きな自然石も搬入したことを示す。先古典期中期後半のセイバルの人々にとって超大型のほぼ未加工の黒曜石の自然石は、緑色石製磨製石斧と同様に象徴・儀礼的に重要な意味をもったと考えられる。

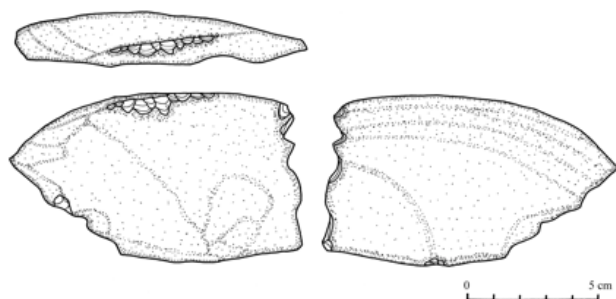


図7 先古典期中期後半のエスコバ3期にセイバル遺跡の「中央広場」に供物として埋納されたほぼ未加工の黒曜石の大きな自然石



図8 先古典期中期後半のエスコバ3期にセイバル遺跡の「中央広場」に供物として埋納された黒曜石製石刃残核

6-2. 供物 170

セイバルの権力者は、先古典期中期後半にはマヤ低地の他の諸遺跡との密接な交流を示す土器や完形の黒曜石製石刃残核を「中央広場」に供物として埋納するようになった。供物 170（発掘番号 CB203K-3-6-3）は、「中央広場」に面する「E グループ」の東西の中心軸上のほぼ中央部に埋納されたエスコバ3期の大型の土器およびその前と下の完形の黒曜石製石刃残核からなる（図8）。土器の下の方の石刃残核は、立った状態で埋納されていた。先古典期後期や古典期のセイバルの住人は、黒曜石製石刃残核を剥片石核として再利用したので先古典期後期以降に完形の石刃残核は全く出土していない。セイバル遺跡で出土した計 14 点の完形の石刃残核は、先古典期後期後半のエスコバ2期（6点）とエスコバ3期（8点）に属する。エスコバ2期の支配層住居跡「ユニット54」（発掘番号 CB210A-4-6-3）の1点を除き、13点の完形の石刃残核は「中央広場」に埋納されたことが特筆に値する。

蛍光X線分析によれば、供物 170 の2点の石刃残核ともサン・マルティン・ヒロテペケ産である。石刃の製作者は、いずれの石刃核の場合も押圧剥離の力が入り過ぎて石刃の幅が広くなり石刃核の下端部の裏面まで達してしまった（英語で *plunge blade*）。その後打面再生をしたが、線引きなどの打面調整は行わなかった。長さが 6.7 cm の石刃残核では 12 点の石刃を押圧剥離した後に、打面再生した。しかし石刃の剥離に失敗して短い剥片を 1 点剥離するにとどまり、ちょうつがい (*hinge*) 状の大きな段が剥離作業面に残ってしまった。長さが 6.4 cm の石刃残核では 9 点の石刃を剥離した後に打面再生して、3 点の石刃を剥離した。最後の石刃は失敗作であり、ちょうつがい状の大きな段が剥離作業面

に残った。2 点の石刃残核は極めて短い上に幅が狭く、石材を最大限に利用した石刃の製作者の高度な製作技術が窺われる（表 2）。

7. 先古典期中期後半の公共広場の生け贅墓に副葬された黒曜石製石器

7-1. 墓 153

セイバルの権力者は、先古典期中期後半から「中央広場」に生け贅墓を埋葬するようになった。これは、先古典期中期前半にはなかった習慣である。墓 153（発掘番号 CB203K-1-10-2）は、先古典期中期後半のエスコバ 2 期の生け贅墓である。セイバルの権力者は、「中央広場」に面する「E グループ」の東西の中心軸上のほぼ中央部の東西南北に 1 体ずつ、計 4 体の遺体を埋葬した（図 1）。3 体は生け贅にされた幼児の遺体の一部、1 体が座葬の若い成人男性である。生け贅も供物の一部をなしたといえよう。

計 5 点の完形の黒曜石製石刃残核を副葬したが、各遺体に 1 点ずつ、4 体の遺体の中央に 1 点を配置した（表 5）。蛍光 X 線分析によれば、5 点全てがサン・マルティン・ヒロテペケ産である。それに加えて北の遺体には、緑色石製石斧の破片、東、西と南の遺体には翡翠製数珠、中央には青色石製磨り石を副葬した（図 9）。マヤの東西南北は色と結びついていたが、マヤ人にとって、緑・青は世界の中心の神聖な色であった [Miller and Taube 1993:101-102]。翡翠は緑色の硬い玉であり、メソアメリカではグアテマラ高地だけで産出する。翡翠は、その神聖な色、希少性、硬さゆえに支配層の間で威信財として金よりも重宝された。

型式	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
エスコバ 2 期、墓 153（発掘番号 CB203K-1-10-2）				
石刃残核	9	3	2.1	78.3
石刃残核	5.8	1.8	1	12.1
石刃残核	5.5	1.6	1	12.8
石刃残核	5.5	1.6	0.9	10.2
石刃残核	4.9	2	1.6	16.5
エスコバ 3 期、墓 145（発掘番号 CB203K-1-8-4）				
ほぼ完形の石刃	10.9	1.3	0.4	5.2
石刃残核	8.5	1.4	1.3	18.2
未加工の自然石	6.1	2.1	0.9	6.9
エスコバ 3 期、墓 146（発掘番号 CB203K-1-9-2）				
石刃残核	9.7	1.7	1.6	29.1
石刃残核	9.4	1.5	1.4	25.4
石刃残核	8.8	1.4	1.3	20.7
石刃残核	8.3	1.5	1.4	22.3

表 5 先古典期中期後半のセイバル遺跡の「中央広場」の生け贅墓に副葬された黒曜石製石器



図 9 先古典期中期後半のエスコバ 2 期にセイバル遺跡の「中央広場」に埋葬された墓 153 の副葬品（5 点の黒曜石製残核、緑色石製石斧片、翡翠製数珠、青色石製磨り石）



図 10 先古典期中期後半のエスコバ 3 期にセイバル遺跡の「中央広場」に埋葬された墓 145 の副葬品（左からシラタマコゴメと土製数珠、ほぼ完形の黒曜石製石刃、石刃残核と黒曜石の自然石）

5 点の完形の黒曜石製石刃残核では北の石刃残核が長さ 9cm で最も大きく、石刃の製作者は線引きによって調整した打面から 9 点、下端部から 2 点の石刃を剥離した。他の 4 点の石刃残核には、打面調整は認められない。東の石刃残核は長さが 5.8cm であり、再生した打面から 12 点の石刃が剥離された。西の石刃残核は長さが 5.5cm であり、石刃の製作者は打面から 8 点の石刃を剥離した後に下端部に打面再生して 6 点の石刃を剥離した。北の石刃残核は長さが 5.5cm であり、再生した打面から 9 点の石刃を剥離したが、石刃の剥離に失敗してちょうつがい状の大きな段が剥離作業面上にできてしまった。中央の石刃残核は長さが 4.9cm と 5 点の中で最も短く、石刃の製作者は再生した打面から 13 点の石刃を剥離した。完形の石刃残核は、緑色石製石斧の破片や翡翠製数珠などと共に、先古典期中期のセイバルの人々にとって象徴・儀礼的に重要な意味をもつ副葬品であったと考えられる。

7-2. 墓 145

墓 145（発掘番号 CB203K-1-8-4）は、先古典期中期後半のエスコバ 3 期の生け贅墓である。生け贅にされた 2 歳から 4 歳の 2 体の幼児の遺体の一部が、「中央広場」に面する「E グループ」の東西の中心軸上のほぼ中央部に屈葬された（図 1）。2 体の幼児の頭位は北であり、それぞれ東と西に向き合って埋葬された。1 点の土製数珠と 10 点以上の巻貝製数珠からなる装飾品の他に、ほぼ完形の石刃、完形の石刃残核と細長く薄い未加工の黒曜石の自然石が副葬された（図 10）。動物考古学者のアーシェリー・シャープ（Ashley Shape、2015 年私信）の分析によれば、巻貝はカリブ海産のシラタマコゴメである。

蛍光 X 線分析によれば、3 点の黒曜石はサン・マルティン・ヒロテペケ産である。使用痕分析によって、ほぼ完形の石刃の両刃部に使用痕の形成初期に見られる使用痕パターン h と刃部に平行する線状痕が認められた。すなわち、石刃の使用者は石刃をあまり使い込まず、同定不能の被加工物を切断

した。

完形の石刃残核は細長く、10点の石刃の剥離痕が残されている。石刃の製作者は、9点目の石刃を押圧剥離した際に、力が入り過ぎて石刃の幅が広くなり石刃核の下端部の裏面まで達してしまった。その後、打面再生を行い、10点目の最後の石刃を剥離した。最終的な打面の長さは1.1cm、幅は0.8cmと極めて狭い。石刃残核の幅(1.4cm)は、ほぼ完形の石刃の幅(1.3cm)とほぼ同じであり、石刃の製作者の高度な製作技術を垣間見ることができる(表5)。未加工の黒曜石の自然石は、一見すると打撃石刃のような大きさと細長く薄い特殊な形状をなし、セイバル遺跡で唯一の出土例である。この黒曜石の自然石は、海産貝の装飾品、ほぼ完形の石刃や完形の石刃残核と共に、先古典期中期のセイバルの人々にとって象徴・儀礼的に重要な意味をもったといえよう。

7-3. 墓 146

墓 146(発掘番号 CB203K-1-9-2)は、墓 145と同様に「中央広場」の床面 4Bの下、墓 145の南 1mほどに埋葬された。それは、墓 145と同時期の先古典期中期後半のエスコバ 3期の生け贄墓であり、3歳から5歳の幼児の遺体の一部が屈葬された(図1)。副葬品としては、ほぼ完形の2点の土器(鉢と皿)が墓の上部に置かれ、その下部には大型の土器の取っ手が西に、その下端部を中央に向けて4点の完形の黒曜石製石刃残核がそれぞれ北東、北西、南東、南西に、穴が貫通していない翡翠製数珠の未完成品、未加工の磁鉄鉱と巻貝製数珠が中央に配置された(図11)。巻貝は、墓 145と同じくカリブ海産のシラタマコゴメである(Ashley Shape、2015年私信)。

蛍光X線分析によれば、4点の完形の黒曜石製石刃残核は全てサン・マルティン・ヒロテペケ産である。2点の石刃残核には、打面調整や石刃製作の失敗の痕跡が認められず、長さが9.7cmの石刃残核には10点、長さが9.4cmの石刃残核には11点の石刃の剥離痕がそれぞれ残されている(表5)。長さが8.8cmの石刃残核には、11点の石刃の剥離痕がある。打面調整の痕跡はない。石刃の製作者は、石刃を製作した際に生じた剥離作業面の一つの階段(step)状の大きな段を両側から石刃を剥離することによって調整した。長さが8.3cmの石刃残核の打面は、線引きによって調整した。11点の石刃を剥離した痕跡があるが、石刃の製作者はちょうつがい状の大きな段を剥離作業面から除去するために下端部から2点の剥片を打撃剥離した。黒曜石製石刃残核は、高度な製作技術をもつ石刃の製作者によって作り出され、グアテマラ高地から搬入した翡翠製装飾品や磁鉄鉱、海産貝製装飾品という中央に置いた重要な副葬品を指し示して、マヤの小宇宙を象徴したと考えられる。



図 11 先古典期中期後半のエスコバ 3 期にセイバル遺跡の「中央広場」に埋葬された墓 146の副葬品(西に大型の土器の取っ手、中央を指し示す 4 点の黒曜石製石刃残核、中央に翡翠とシラタマコゴメの数珠および磁鉄鉱)

8. 結論

本論は、セイバル遺跡で先古典期中期後半の支配層住居や公共広場に埋納された黒曜石製石器を中心に、先古典期マヤ文明の宗教儀礼とものづくりという先古典期マヤ人の具体的な行為・活動の一端を実証的に明らかにした。先古典期中期後半のセイバルでは、支配層がグアテマラ高地から黒曜石製石刃核や大きな自然石を搬入し、自らの住居で黒曜石製石刃を生産した。先古典期中期の支配層は、美術品や重要な実用品の黒曜石製石刃を生産して地位を正当化・強化し、ものづくりを政治的道具として活用したと考えられる。

黒曜石製石刃の製作屑は単なるゴミではなく、宗教儀礼的な側面をもった。古典期マヤ文明の諸都市では工房で廃棄された大量の石刃の製作屑が王や貴族の墓および神殿ピラミッドなどの公共建築の中に埋納されたのに対して、先古典期中期後半のセイバルの支配層は石刃の製作屑を住居に注意深く埋納した。支配層は、先古典期中期後半にサン・マルティン・ヒロテペケ産黒曜石製の超大型の剥片石核とほぼ完形の初期押圧石刃、木の加工具のエル・チャヤル産黒曜石製挟入石刃 10 点と放血儀礼に使用したサン・マルティン・ヒロテペケ産黒曜石製挟入石刃といった特別な石器を住居に供物として埋納した。

古典期マヤ文明の神殿ピラミッドは、王権を強化する神聖な山を象徴し、神殿更新が繰り返されて壮麗な王墓や供物が埋納された。対照的に、先古典期中期のセイバルでは公共広場が公共祭祀の主要な舞台であり続け、神殿更新だけでなく広場更新が重要な意味をもった。居住の定住性の度合いが異なる多様な集団が携わった公共祭祀および公共広場や公共祭祀建築を更新する共同作業は、社会的な結束やアイデンティティを固めてマヤ文明の形成に重要な役割を果たした。先古典期後期や古典期に王権を生み出し、公共祭祀を形作り巨大な神殿ピラミッドを建設する必要性を住民に納得させて物質化したイデオロギー（観念体系）は、地域間交換や戦争など他の要因と相互に作用して人口の集中や都市建設の大きな原動力になったと考えられる。

広場更新と公共広場で繰り返し慣習的に行われた埋納儀礼を含む公共祭祀という反復的な実践は、集団の記憶を生成し、公共広場の神聖性を強化した。しかしながら、型にはまった同じ実践が繰り返されたのではなく、権力者とそれ以外の人々とのせめぎ合いの中で新しい実践も生み出された。セイバルの権力者は、公共祭祀において先古典期中期前半のレアル期には主に緑色石製磨製石斧を公共広場に埋納したが、先古典期中期後半のエスコバ期には支配層の墓や生け贄墓を埋葬し、高度な製作技術が窺われる完形の石刃残核をはじめとする特別な黒曜石製石器などの新たな供物や副葬品を埋納するようになった。完形の黒曜石製石刃核を公共広場の供物や墓の副葬品として埋納するのは、先古典期中期後半に特有の実践であった。

セイバルの公共広場に埋葬された支配層男性は、13 というメソアメリカの神聖な数の概念を遅くとも先古典期中期後半に享受していた。この支配層男性は、マヤ文字や図像を描き、黒曜石製石刃を製作し、石刃を使って骨・貝製品や木製品のような美術品を製作した可能性がある。埋納された黒曜石製石器の数は、公共広場に供物として埋納された緑色石製磨製石斧の数と同様にマヤの重要な数字に対応した。黒曜石製石器の数は上記の 10 や 13 以外に、3 つの炉石の 3 点、四方位を示す 4 点、マヤ文明で使われた 20 進法の基本となる 20 の四分の一あるいは四方位に中心の 1 を加えた 5 点などがある。完形の黒曜石製石刃残核や翡翠製装飾品などの象徴・儀礼的に重要な供物を公共広場に十字状に

埋納して、マヤの小宇宙を象徴する場合もあった。

先古典期中期後半のセイバルの権力者は、マヤ文明の重要な数字、方角や世界観を既に操っていた。支配層が関わった黒曜石製石刃核などの交換、石刃の製作、使用と埋納儀礼についての知識と実践は、権力基盤を強化して王権の形成に一役買ったのである。

【謝辞】

本論は、平成 26～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（領域代表：青山和夫、課題番号 26101003）、平成 26～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「先古典期マヤ人の日常生活と社会経済組織の基礎的研究」（代表：青山和夫、課題番号 26300025）の成果の一部である。査読者から極めて有益かつ建設的なコメントをいただいた。記して感謝します。

引用文献

Aoyama, Kazuo (青山和夫)

- 1999 *Ancient Maya State, Urbanism, Exchange, and Craft Specialization: Chipped Stone Evidence from the Copán Valley and the La Entrada Region, Honduras*. University of Pittsburgh Memoirs in Latin American Archaeology No. 12, Pittsburgh.
- 2006 Political and Socioeconomic Implications of Classic Maya Lithic Artifacts from the Main Plaza of Aguateca, Guatemala. *Journal de la Société des Américanistes* 92:7-40.
- 2007 Elite Artists and Craft Producers in Classic Maya Society: Lithic Evidence from Aguateca, Guatemala. *Latin American Antiquity* 18:3-26.
- 2009 *Elite Craft Producers, Artists, and Warriors at Aguateca: Lithic Analysis*. Monographs of the Aguateca Archaeological Project First Phase Volume 2. The University Press of Utah, Salt Lake City, Utah.
- 2014 Symbolic and Ritual Dimensions of Exchange, Production, Use, and Deposition of Ancient Maya Obsidian Artifacts. In *Obsidian Reflections: Symbolic Dimensions of Obsidian in Mesoamerica*, edited by Marc Levine and David Carballo, pp. 127-158. University Press of Colorado, Boulder.
- 2002 「専門手工業生産と古代マヤ文明の都市性—ホンジュラス西部コパン遺跡の打製石器生産を通じて—」『考古学研究』49(3):85-105.
- 2007 「古典期マヤ国家の権力基盤—グアテマラ共和国アグアテカ遺跡と周辺遺跡の石器研究を中心に—」『考古学研究』54(2):70-90.
- 2013 「グアテマラ共和国セイバル遺跡の調査とマヤ文明の起源」『古代文化』65(2):128-130.
- 2014 「先古典期マヤ文明の遠距離交換と石器製作—グアテマラ共和国セイバル遺跡の先古典期中期の打製石器」『考古学研究』61(3):83-94.
- 2015 「マヤ文明の起源と公共祭祀—グアテマラ・セイバル遺跡の公共祭祀建築と緑色石製磨製石斧の供物を中心に—」『古代文化』67(2):53-72.

Aoyama, Kazuo and Juan Pedro Laporte

- 2009 Análisis de Lítica Menor Elaborada con Obsidiana en el Sureste y Centro-oeste de Petén, Guatemala. *U tz'ib* 4(6):11-40. Asociación Tikal, Guatemala.
- Braswell, Geoffrey E., John E. Clark, Kazuo Aoyama, Heather I. McKillop and Michael D. Glascock
2000 Determining the Geological Provenance of Obsidian Artifacts from the Maya Region: A Test of the Efficacy of Visual Sourcing. *Latin American Antiquity* 11:269-282.
- Clark, John
1997 Prismatic Blademaking, Craftsmanship, and Production: An Analysis of Obsidian Refuse from Ojo de Agua, Chiapas, Mexico. *Ancient Mesoamerica* 8:137-159.
- Coggins, Clemency
1992 *Artifacts from the Cenote of Sacrifice, Chichen Itza, Yucatan*. Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University 10(3), Cambridge, MA.
- Inomata, Takeshi
2001 The Power and Ideology of Artistic Creation: Elite Craft Specialists in Classic Maya Society. *Current Anthropology* 42:321-349.
- Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Kazuo Aoyama, Víctor Castillo and Hitoshi Yonenobu
2013 Early Ceremonial Constructions at Ceibal, Guatemala, and the Origins of Lowland Maya Civilization. *Science* 340:467-471.
- Inomata, Takeshi, Jessica MacLellan, Daniela Triadan, Jessica Munson, Melissa Burham, Kazuo Aoyama, Hiroo Nasu, Flory Pinzón and Hitoshi Yonenobu
2015 Development of Sedentary Communities in the Maya Lowlands: Coexisting Mobile Groups and Public Ceremonies at Ceibal, Guatemala. *Proceedings of the National Academy of Sciences USA (PNAS)* 112(14):4268-4273.
- Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Otto Román, Estela Pinto, Jessica Munson and Kenichiro Tsukamoto
2009 Cambios Sociales durante los Periodos Preclásico y Clásico en Ceibal: Los Resultados del Proyecto Arqueológico Ceibal-Petexbatun. In *XXII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala*, edited by J. Laporte, B. Arroyo and H. Mejía, pp. 593-601. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.
- Landa, Fray Diego de
1994 [15●●] *Relación de las Cosas de Yucatán*. Cien de México, Mexico.
- Miller, Mary and Karl Taube
1993 *An Illustrated Dictionary of the Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya*. Thames and Hudson, London. (2000 『図説マヤ・アステカ神話宗教事典』 武井摩理訳、東洋書林、東京)
- Moholy-Nagy, Hattula
1997 Middens, Construction Fill, and Offerings: Evidence for the Organization of Classic Period Craft Production at Tikal, Guatemala. *Journal of Field Archaeology* 24:293-313.
- Motolinía, Fray Toribio
1973 [1526] *Historia de los Indios de la Nueva España*. Editorial Porrúa, Mexico.
- Nations, James and John Clark

1983 The Bows and Arrows of the Lacandon Maya. *Archaeology* 36:36-43.

Sabloff, Jeremy

1994 *The New Archaeology and the Ancient Maya*. W.H. Freeman, New York. (1998 『新しい考古学と古代マヤ文明』 青山和夫訳、新評論、東京)

Wenke Robert and Deborah Olszewski

2007 *Patterns in Prehistory: Humankind's First Three Million Years*. Fifth edition. Oxford University Press, New York.

Wiley, Gordon

1978 *Excavations at Seibal, Department of Peten, Guatemala: Artifacts*. Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University 14(1), Cambridge, MA.

Ritual Practices and Craft Production of the Preclassic Maya:

Obsidian Artifacts deposited in Ceibal, Guatemala during the Middle Preclassic period

Kazuo Aoyama
(Ibaraki University)

Key words: ritual practices, craft production, power, obsidian artifacts, Preclassic Maya

This article examines some aspects of ritual practices and craft production of the Preclassic Maya by means of a study of obsidian artifacts from the late Middle Preclassic Ceibal, Guatemala. An elite household member may have manufactured obsidian percussion and pressure blades and carefully deposited obsidian debris in the residence during the Escoba 2 phase (600 - 450 B.C.). Elites in the central part of Ceibal may have engaged in various kinds of artistic creation and craft production, including obsidian prismatic blade production during the late Middle Preclassic period. Obsidian blade production by a skilled elite craftsman may have been loaded with ideological meaning. I argue that craft production by elites was important in exclusionary tactics and elite identity among the Preclassic and Classic Maya. A high status male buried in the Central Plaza with 13 obsidian prismatic blades and a polyhedral core at Ceibal during the Escoba 3 phase (450 - 350 B.C.) indicates that number 13 may have held cosmological significance, such as the number 13 used in the 260-day calendar as well as the supposed 13 layers of heaven. The Middle Preclassic elites conducted public rituals in a public plaza, depositing obsidian polyhedral cores and other artifacts with some symbolic significance as caches and offerings for the scarified burials. The knowledge and practices, corresponding to the exchange of obsidian blade cores, blade production and use, as well as their deposition, played an important role in reinforcement of power structure and the formation of Maya kingship.

原稿受領日 2015 年 8 月 30 日

原稿採択決定日 2015 年 9 月 30 日